

こきつけるのだろうか。それにしても、この講演のあとから、Optical computing の一般講演がたくさん続いており、ICOの中味もかなり変化しつつあるのを感じた。

レセプションでの料理はなかなか美味である。レセプションはとにかく料理の上手なところであるべきだと、あれこれ楽しみながら思う。挨拶の一人、past president である Lohmann が日本語の「ありがとう」を覚えるのに努力をした話には拍手が多かった。わにの alligator と覚えたところ、日曜日の練習がなかったら月曜日になってなかなか出て来なく、やっと思い出して crocodile といってしまった話である。

日本語といえば、OHP で写した絵の言葉の部分を差しかえてみたり、討論で立往生してしまった日本人講演者に対し、「あとで話しましょう」といってみたり、日本語を少しでも使ってみる外国人が多かった。

ポスターセッションは詳しくきけてわかりやすくてよい。一般に日本人は説明時間には自分のパネルのところ立っていたが、外国人には姿を見せない人もかなりいて、きけなくて残念というのも多かった。せっかく来た札幌でいろいろ忙しいのだろうか。

参加者はおよそ550人、うち日本人は350人程度である。中国からの参加者が30人くらいいたのが目立つ。ロサンゼルスオリンピックで中国人の参加が多かったこ



図1 ポスターセッション会場

とを思い出させた。それでもお国の事情からキャンセルも多い。カナダからは3年後の総会をケベックで開くために下見にきていた。

総参加者のうち、女性(同伴の夫人たちは除いて)は全部で10人程度である。若い人からかなりの年の方までさまざまであるが、日本人では私一人らしい。中国でさえ2人はいるというのに、350人のうち1人とは少々残念に思う。私一人といえば、cochairperson の役目を引き受けた。そのため、chairman か chairperson かでだいぶ議論したのだそうである。いろいろご心配いただきまして crocodile! (1984年8月29日受理)

## ICO-13 Post Congress Meeting, Tsukuba 報告

### 主催側より

松田 浄史

機械技術研究所

〒305 茨城県新治郡桜村並木 1-2

第13回国際光学委員会総会が8月20日から24日まで札幌市教育文化会館で開催されたが、そのPost Congress Meeting が8月27日、28日の両日、筑波研究学園都市の中心、センタービルの筑波第一ホテルで開催された。会議は第一日目が“Present and Future Optical Techniques in Industries”というテーマで招待講演が行なわれ、第二日目は筑波の光学関連研究機関を見学する Technical Visit が行なわれた。

本会議が開催されるまでの経過を簡単に述べると、筑波地区の最初の打合せ会が1983年1月12日に行なわれ、藤原史郎委員長および各委員が決定されたが、その前に藤原史郎(筑波大)、田中敬一(当時計量研)、河野嗣男(当時機械技研)、松田浄史(機械技研)の4名で準備委員会的性格の会合を数回持ち、筑波でPost Congress Meeting を行なう場合、第一日目に招待講演、第二日目に見学会を行なうなどの概略をすでに検討していた。その後、ICO-13 ポストコングレスミーティング筑波地区現地実行委員会の第一回目の会合が開かれたのが1983年3月9日であり、この席でこれまでの経過説明がなされた。このとき、田中敬一氏はすでに北大教授として栄転され、また河野嗣男氏は金沢大教授として栄転することが決まっていた。初期の頃からの事情を知っているのは藤原先生と筆者の2人だけになってしまった。し

かし谷田貝氏が筑波大に来られ、副委員長として藤原委員長を補佐し、筑波現地実行委員会各委員の協力を得、会議が開催されるまで11回にわたる委員会を通して会議に関する具体的な実行計画が進められていった。委員会の最大の問題は開催に必要な資金をどうするかということであった。当初、札幌の本会議から資金が捻出されるものと考えていたが、実際にはそれが不可能とわかり独立採算になった。河野委員の提案の応用物理学会からの国際会議費捻出などを検討したがうまくいかず、本会議の準備委員会で決定された登録料と寄付で何とか会議を開く目途がついた。しかし苦しい財政事情にはかわりなく、各委員は緊縮財政で大変苦労させられたことと思う。

会議は8月27日から始まり、第一日目の招待講演は午前中のセッションで各国の光学工業を紹介し、午後は最近のトピックスに焦点をあてた内容になっている。午前中のセッションの“Present Optics in China”の講演では、中国科学院のWang博士が本会議出席後、用事のため筑波の会議に出席できなくなり、西安光学精密機械研究所長のXue博士が代読を行なった。また、午後のバイオオプティックス関連のトピックスでは、当初予定の招待講演者の来日できない旨の返事が遅れ、急遽ハンガリーのGreguss教授にお願いし心良くお引受けいただいた。また筑波のプログラムを決めるにあたっては、本会議のプログラム委員長、各委員等にご協力いただいた。第二日目の8月28日は筑波の研究所の見学が行なわれ、大変な人気であった。当初予定よりも大幅に見学者が増加してどのコースも満員となり、電総研・計量研のコース、機械技研のコースは急遽午前午後各1回ずつ計4コース増やし、担当はその対策に追われ、講演も聞けずに走りまわった人もいたようである。

最終的な集計によると、筑波の会議の参加者は、外国人143名（同伴者26名を含む）、日本人104名（同伴者1名を含む）の計247名であった。会議場の収容人員が250名であり、この点からすると適当な参加人数である。また、数字が示すように参加者は日本人よりも外国人のほうが多く、とくに中国、西独、米国からの出席者が多かった。2日間の会議は参加者の協力と筑波の実行委員の奮闘により何とか無事終了した。会議終了後、フランスのマレシャル先生を始め国内外の参加者から「筑波の会議は成功だった。おめでとう」といわれ、藤原先生を委員長とする筑波実行委員会もほっと胸をなでおろした次第である。また、招待講演者は非常に著名な方々ばかりであり、参加者の中にも多数の著名な方々が参加し、

若い研究者達にとっては論文等で名前を知っている人々の講演を直に聞き、またレセプション等では直接話す機会が得られ、感銘を受けた人も多いと思われる。

(1984年9月5日受理)

## ICO-13 Post Congress Meeting, Tsukuba に参加して

西沢 絃一

日本板硝子(株)筑波研究所  
〒300-26 茨城県筑波郡豊里町 5-4

札幌でのICO-13の主会議が成功裏に終わった後、筑波研究学園都市の中央、筑波第一ホテルで8月27日(月)に開催されたICO-13 Post Congress Meetingに参加した。8件の講演がすべて招待講演であり、かつ札幌での会議で親交を深めて来たようで、250名(外国人参加者117名)近い参加者は、すっかりリラックスしているようであった。筑波研究学園都市を英語ではTsukuba Science Cityといい、国外のほうが有名で外国人参加者は一様にきわめて高い関心を持っていた。会場の設定としては時宜を得たものと思う。

この会議の実行委員長でもある藤原教授(筑波大)から開会の辞があり、9時半を少し過ぎたところで島田氏(電総研)の司会でセッションが始まった。

第1の講演は伊藤氏(キャノン)の「日本の光学工業技術の現状と未来」というタイトルで日本の光学工業が戦後の混乱から今日までどのように発展してきたかを事例をもって述べられた。とくに日本が軽薄短小(light, thin, short, small, LTSSというキーワードで表現)を目標に開発を進めてきたことが強調され外国人には印象深かったようだ。

第2の講演はShannon教授(アリゾナ大)の「米国における最近の光学技術」であった。教授はOSAの会長も歴任された実力者で、さすがに話の内容にも迫力が感じられた。日本の光学が民生向で発展してきたのに対し、米国では政府主導型で開発されてきたために、日本のLTSSに対しLFAIだと応酬された。すなわち、large, fast, aspheric, inexpensiveである。

第3の講演はBaker氏(Sira Ltd.)の「欧州における光学工業」であった。光学のもつ特徴を生かしたいくつかのセンサー、計測器の紹介があったが、もう少し欧州のグローバルな光学事業を聴きたかった。

第4の講演は、Wang教授(中国科学院)の「中国に

おける光学の進歩」であったが Wang 教授が出席できず、同僚の Xue 教授が代りに講演された。中国における光学の研究をレーザーをはじめ広い範囲にわたって現状の紹介があった。1979年には中国光学学会が設立され、6種類もの光学関連の学会誌が発行されるなどきわめて活況を呈していることが感じられた。ICOにも27名の参加者があり光学にとり組む姿勢は真剣そのものであった。

午前中2件の講演が終わったあとのコーヒーブレイクならぬ日本茶ブレイクは非常によかったとある外国の研究者が話してくれた。

昼食を挟んで午後の講演は、諸隅氏(オリンパス)の司会でアリゾナ大学のWyant教授による「最近の光学測定技術」の講演から始まった。少し眠気を感じず時間帯ではあるが、マイクロプロセッサの導入、新しいソフトウェアの開発、一次元センサー(CCDアレイ)の利用などにより光学測定技術が飛躍的に進歩した話を事例で示され興味深く拝聴した。コンピュータとエレクトロニクスに多大の費用を要し、肝心の光学系に金が回ってこないという嘆きは、同じ悩みをもつ筆者も共感を覚えた。

午後の2番手は角田氏(日立)の光ディスクの講演であった。よく準備されて美しいスライドが印象的で、ストーリーも明解で光ディスクの技術の現状がよく理解できた。講演後、多くの外国人参加者から質問を受けており、この分野の研究での日本のリーダーの位置がよくわかった。

コーヒーブレイクを挟んで欧州から2件の講演が続けて行なわれた。第1は、Lowenthal教授(パリ大学)の「2, 3次元像を作る新しいX線顕微鏡」の講演であった。軟X線を用いたバイオケミストリーへの応用など興味深いテーマであった。最後はハンガリーから来日されたGreguss教授(ブタペスト工科大)の「生体への光照射効果」という講演で、レーザー光などいろいろな光を生体に照射することにより有益な効果をもたらすかどうかを系統的に調査したが、波長依存性以外に顕著な効果は見いだされなかったと結んだ。

午後6時から同じ場所で立食会があり、何人かの御婦人が色どりを添え盛会であった。セレモニーの前に高エネルギー物理学研究所の佐々木教授がスライドを用いてフォトンファクトリーの紹介をされたのも好評であった。

河野教授(金沢大)の司会でセレモニーが始まり、田幸教授(東京理科大)、Lowenthal教授(ICO-14の会長)の挨拶のあと三宅教授の音頭で乾杯し、参加者一同は夏の夜を十分楽しむことができた。

翌日の研究所見学会は電総研、機械技研など7研究所を巡る5コースが用意されていたが希望者が多く2コースが追加されることになった。とくに外国人参加者の関心の高さには驚かされた。

藤原実行委員長、谷田貝副委員長をはじめ会議をお世話くださった方々に、きわめて気分のよい学会であったことを報告し感謝申し上げ印象記としたい。

(1984年8月31日受理)